

登場人物

藤沢 綾（ふじさわ あや）

21歳（大学三回生）

明るく社交的だが、大雑把な性格。

周りの人間には、姉御肌と慕われることが多いが、どこか抜けている。

佐藤 大輝（さとう だいき）

20歳（大学二回生）

綾と同じサークルの後輩。

優しく人懐っこい性格で、綾には特に懐いている。

「もう、大輝ったら、またこんなに散らかして……」

私は、大輝の部屋に散乱するアニメグッズやゲームソフトを片付けながら、独り言を呟いた。

大学のサークル仲間で一つ年下の大輝の部屋は、もはや私の第二の家と化している。実家が遠い私にとって、大学から歩いてすぐのこの部屋は、時間つぶしに最適だった。それに、大輝はなんだかんだ言って、私の言うことを聞いてくれる。まるで、忠犬みたいに。

「あーあ、また新作のフィギュア、買ってる……」

棚の上にきちんと飾られた、未開封の美少女フィギュアを見上げる。……まあ、私も人のこと言えないか。つつい、こういうの買っちゃうんだよね。

（それにしても、大輝ってば、ホントにマメっていうか……）

私が初めてこの部屋に来た時のことを思い出す。サークルの飲み会の後、数人で上がり込んで朝まで飲んだのだった。

「綾先輩、どうぞ！ 狭いですけど、くつろいでくださいね！」

大輝は照れくさそうに笑った。その笑顔が、なんだか小動物みたいで可愛かったのを覚えてる。

「あ、先輩、これ好きですよ？この前、一緒に見てたアニメの…」

私が好きそうなアニメのグッズを、わざわざ用意してくれていた。しかも、私が「可愛い」って言ったキャラクターの、一番くじの景品まで。

「えっ、これ、どうしたの!？」

「…ちよっと、頑張っちゃいました」

そう言って、はにかむ大輝。

(…もう、なんなの、この子。可愛すぎでしょ。)

大輝は、サークルの中でも人気者だ。人当たりが良くて、誰にでも優しい。でも、私には、特に親切にしてくれる気がする。

「綾先輩、これ、飲みます？あ、コップ、新しいの出しますね！」

「綾先輩、今日、何かあったんすか？…元氣ないっすね」

「綾先輩、今日あのアニメ、先輩の推しが出る回ですよ！」

「綾先輩！…あ、いや、なんでもないっす」

いつも、私のことを気にかけてくれる。まるで、子犬が尻尾を振ってじゃれてくるみた

いに、人懐っこい。

(…もしかして、私のこと、好きなのかな?)

そんな考えが、頭をよぎる。いやいや、まさかね。大輝は、ただの後輩。それも、とびきり可愛い、弟みたいな存在。

「…それにしても、大輝、最近ちょっと変?」

ふと、そんなことを思う。

(前は、私が部屋に来ると、もっと嬉しそうにしていたのに。最近、なんか…よそよそしい? いや、優しいんだけど、ちょっと距離を感じるというか…)

「私、なにかしたっけ…?」

(まさか、彼女できた…とか?)

ありえない話じゃない。大輝は、ああ見えて優しいし、顔だって悪くない。いや、むしろ、かなり整ってる方だ。サークル内でも、密かに大輝を狙ってる女子はいるらしい。

(…別に、私は大輝のこと、恋愛対象として見てるわけじゃないけど)

私は、大輝のベッドにゴロンと寝転がった。大輝の匂いにする。

(…なんか、落ち着くんだよ、この匂い。)

「はぁ…疲れた…」

最近、レポートとか課題とか、色々あって寝不足気味だ。

(…ちよつとだけ、寝ちゃおうかな。大輝も、まだ帰ってこないみたいだし)
気が付くと私は、大輝のにおいを感じながら眠りに落ちていた。

(…ん…なんか、寝心地悪い…?)

私は、薄っすらと目を開けた。明るかったはずの部屋が薄暗い。

(…ってどうか、これ…どういう状況?)

私は、自分の体を見て、愕然とした。手首と足首が、ベッドのフレームに、しっかりと縛り付けられている。外そうと身を振ってみるが、ギシッと音が鳴るだけで外せそうになかった。

(…何これ?…ドッキリ?)

「だ…大輝…?」

戸惑いを隠せず掠れた声で、大輝の名前を呼んだ。

部屋の隅に、人影が見えた。大輝だ。

でも、いつもの大輝じゃない。…なんか、雰囲気が違う。

「…起きたんだ、綾先輩」

大輝の声が、静まり返った部屋に低く響く。

（…え、何その声？いつもと全然違うじゃん…）

「だ、大輝…ちょっとこれ、どういうこと…？外してよ…」

抵抗しようと力を込めてみても、しっかり縛られていて体が全く動かない。大輝は、ゆっくりと近づいてきた。その顔には、見たことのない、冷たい笑みが浮かんでいる。

（何…？冗談…だよ…？）

「…ずーっと、こうしたかったんだ」

心臓が、バクバクと音を立てる。

「…先輩はさ、俺のこと、どう思ってるんですか？」

大輝は、私の耳元で、囁いた。その声は、甘く、そして、どこか狂気を孕んでいた。

「…なんでも言うこと聞く、可愛い後輩…でしょ？」

楽しそうな、それでいてどこか自虐的な笑いを、くすくすと零した。

「…でも、それだけじゃないんです、綾先輩」

優しく私の頬に触れる手のひらは、まるで壊れ物を扱うように繊細で、いつもの大輝を思い出すのに、心の奥底から湧き上がる言いようのない不安が広がる。

「…俺、ずっと前から、先輩のこと…」

大輝の言葉が、途切れる。

（…え、何？続き、言ってよ…!）

「…先輩ってさ、いつも無防備すぎるんですよ」

熱を帯びた視線が、私の身体のラインを下からなぞるようにゆっくりと辿る。

「…俺の部屋で、こんなに簡単に寝ちゃうなんて…」

吐き出されたため息には、呆れと、それから何か別の感情が混じっているように聞こえた。

「…襲ってくれて言ってるようなもんじゃん」

ニヤリと笑ったその笑顔は、いつもみたいに悪戯が成功した子供のような可愛い笑顔じゃない。もっと、野生的な、雄の笑顔だった。心臓が、早鐘のように鳴り響く。

「…大輝、もしかして…怒ってる…?」

「…怒ってる、っていうか…」

大輝は、私の唇に、自分の指をそっと当てた。

「…我慢、できなくなっちゃいました」

視線が合わさった瞬間、その目は、もう、いつもの優しい大輝の目じゃなかった。

「こんなこと、だめだよ。この手をほどこいて？」

ひらひらと拘束された手を揺らしてお願いしてみる。でも、おそらく大輝にその意思がないことはわかっていた。

「無理だよ。もう無理。解いたら先輩逃げるでしょ」

ベッドサイドにいた大輝は、私の足の方に移動する。私の足はベッドの四隅にある木枠に固定されているので、無様に股が広がっていて、スカートからパンツが見えてしまう。

「綾先輩のこんな姿が見れて、俺は嬉しいです」

大輝はうっとり目を細め、幸せを噛み締めるように微笑んだ。視線は私のスカートの中だ。

「やつ…見ないでっ…恥ずかしいよっ」

「綾先輩…ピンクのパンツ、似合ってますね。横についてるの、可愛いリボン…じゃなくて紐ですか!？」

「見ないでって言うてるでしょっ!」

「先輩、紐パンとか履くんだ。えっちだなあ」

（こんな格好でパンツ見られるなんて、恥ずかしすぎる…でも一応可愛いの履いてきてよかった…）

私がよくわからないところに安堵していると、大輝が白々しく続けた。

「そういえば…先輩って、クリが弱いんですよね？」

「…っ!？」

いきなりの発言に、声にならないほど驚いてしまう。

「なに驚いているんですか？よく俺の前で、飲み会で女子トークしてたじゃないですか」

（ぜ…全然気にしてなかった）

「ああいう話聞こえてて、全然平気だと思ってました？」

「だ、大輝…」

「あれから、綾先輩のクリをたくさんいじっちゃう妄想が止まらないですよ」

「なっ…!？」

興奮を隠そうともせずに恍惚とした表情で、じりじりと私の下半身に近づいてくる。

「それに、俺のPCで勝手にいろいろ検索してますよね？」

「えっ!? な、なんで…知ってるの？」

「なんでって、先輩情弱すぎますよ。履歴見れば一発じゃないですか」

くすくすと笑いながら大輝が続ける。

「先輩が何を検索してるのか、俺が気にならないと思いましたが？履歴見てみたらびっくりですよ。エロ漫画、エロ動画ばかり。しかも！クリトリスを弄られてるやつばかり」
決してバレるはずがないと思っていた。あまりの衝撃に言い訳の言葉も見つからず、ただただ、羞恥に顔を赤らめ、口をはくはくと開閉するしかなかった。大輝のニヤニヤ顔が止まらない。

「だから決めたんです。僕が先輩を喜ばせてあげようって。ほら、こういうの好きなんですよね」

「!!!!」

ポケットからピンクローターを取り出して、私の前に見せつけた。

「これ、通販で買ったんです。結構恥ずかしかったんですよ。でも先輩を喜ばせるためだから」

大輝は慈しむように、ゆっくりと手を這わせて、私の太ももを撫で上げた。

「ひゃっ…や、やめて！」

「ここまでして、やめると思います？」

薄暗い部屋の中で、私だけを見つめる据わった瞳。普段の大輝とは全くの別人だ。でも、

その堂々とした態度に服従してしまいそうな自分がいる。

（大輝の目、いつもと全然違う…こんな顔するんだ…）

「先輩の太もも、すべすべだ…」

「…っ…………や…!」

片手ですりすりと太ももを撫でながら、ローターのスイッチを入れ、私のパンツにそつと当てた。軽く触れただけなのに、身体が緊張しているからなのか、その刺激に大きく反応してしまう。

「んうッ…………!」

「あれ？まだちょっと触れただけですよ？」

「ふうっ…ん、んんっ」

「先輩、想像してたよりずっと敏感なのかな」

振動するローターが私のクリトリスの上にびたりと当たり、強く押し付けられる。

「あっ!?…………んっ…………ひッ、いやっ♡」

（まってっ!大輝、当てるところまずぎ…♡）

身体を反らして抗おうとするが、手足を縛られていて思うように体が動かない。一定に震えるローターの刺激で、身体が熱を持ち始める。

ブブブブッ…ブブブブッ…

「せーんばい！パンツにシミができてきましたよ」

「ちがう…！ヤッ…やめて…よっ…んんッ、ひああ…っ♡」

「綾先輩の声、すごくえろいです。もっと聞かせてください」

頭ではダメだと思っているはずなのに、ローターがちゃんと気持ちいいところにあたって、私は変な声を出してしまふ。

「あっ…ん…ッ…んんっ…♡」

「先輩、好きなどこ全部教えてくださいね」

「べ、べつにつ…そんなのない…あ…ッ…」

「隠さなくていいのに。振動強い方が好きだったりします？」

ヴヴヴヴッ…ヴヴヴヴッ…

「ああッッ…!?や、あっ…んう…ッ！」

「綾先輩のパンツ、エロい汁でぬちゅぬちゅ音がしてる」

「や、やだ…ッ…お、おねがいっ！もうやめて…っ…は…んう…♡」

私が必死に頼んでも、大輝はローターを当て続けてくる。

（ぶるぶる、クリずつと揺すられてる…♡ふわふわしてくるっ…）

「せーんばい、やだじゃないでしょ。俺が優しい間に素直になってください」

「あっ…あう…♡は…んっ、んんっ…♡優しいって、どこが…」

「…ああ、もしかして、もーっと強いのがいいんですか？」

「っっ!!…ッ…だめえっ!!」

思わず大きな声を出して抵抗し、足を閉じようと動かしてみたがギッギッとベッドが軋むだけで、楽しそうな大輝にローターを強く押し当てられる。

「外れないでしょ？痛くないけど絶対逃げられない縛り方、勉強したんですよ」

「ああ…っっ♡ひ、んっ…♡あッ…♡」

「ほら、縛られて逃げられない綾先輩のクリに、振動強くしたローターいっぱいぐりぐりしてあげますね」

「えっ…あっ！あうっ…♡んんんッ…だ、だめっ♡」

ヴヴヴッ…ヴヴヴヴッ…ヴヴヴヴッ…

「ひあっ！っ、つよっ…♡んんッ♡や、やめっ…♡んんッ♡」

「どんだんパンツがびちゃびちゃしてきてますよ？」

くちゅ…くちゅ…ぬちゅ…くちゅ…ちゅば…

（やばいっ…こんな格好でひどいことされてるのに…気持ちよくてぼーっとしてきちゃう）

「いやっ！……あっ、んんっ♡や、やめっ……♡」

「このままびちよびちよになったら、俺の布団が先輩に汚されちゃうなあ」

「っ……!?だ、だいきが悪いんだからっ！ああっ♡」

「先輩だったら、俺はいいですよ」

「んうゝゝ♡は、はあ……！んんっ♡♡もうやめ……て……」

（このままされたら……いっちゃうかも。そんな姿、絶対大輝に見せられない……）

ふらつく意識の中で私は必死に快感の高まりに抗っていた。

「そんなにやめてほしいなら、やめてあげます」

「……えっ？」

突然、大輝はローターを止めた。

私は突然無くなった快感に、少し呆けてしまった。ひくひくとクリとおまんこが動いているのが分かる。目を細めた大輝が私の様子を伺って笑っている。

「あれ、やめてほしかったんですよね？物足りなさそうな顔してませんか？」

「……そんなこと、ない」

「素直じゃないですね」

大輝が怪しげな笑みを浮かべると、再び振動音が鳴り、クリに刺激が戻ってくる。

ヴィイイイイン！

「あっ♡んっ…♡や…あああ…ッ…♡」

緩んだ体に強い刺激が走り、また思わず声が出てしまった。

「ほら、やっぱりしてほしいんじゃないですか」

「ああっ♡んいッ、やあっ…♡おしあてな、いでえ…♡」

「ん？押し当てるより、クリ全体にくるくる当てるほうが好きですか？」

「ひあ…あっ♡…それもきもち…っ♡んんっ…♡う、ああ…♡ん…♡」

「ん？きもちいいって言いました？」

思わず出てしまった本音は大輝は聞き逃すことなく、嬉しそうに聞いてくる。

「ひあっ…♡ちがう…ッ…♡んっ…♡んんっ♡」

ヴィイイイン…ヴィイイイン…ヴィイイイン…ヴィイイインッ…

何度も角度を変えてクリトリス全体を刺激する。そのたびに身体がビクッビクッと震えてしまう。

「パンツがもうびちゃびちゃですけど、中はどうなっちゃってるんですかね？」

「あ、待って…！」

大輝に紐をするりと解かれ、パンツを脱がされてしまった。

「わ、すごい。先輩のパンツ、エロい汁でぐしょぐしょになってる。簡単に解けましたね♡ほら、先輩も見てください」

パンツのクロッチ部分を見せつけるように広げられ、羞恥に顔がカッと赤くなる。大輝の言うとおり、私の秘部から染み出た愛液が、パンツにべっとりついて色濃く変わっていた。

「や……っ！」

「あれ？どうしたんですか先輩？顔真っ赤ですよ？」

何も言えずに唇を噛み締める私を、ニヤニヤとからかう大輝はパンツを自分の顔に近づけ、スーッと息を吸い込んだ。

「えーっと、なんてタイトルだったかな。『ドS男子の指テクでデカクリに育てられちゃいました♡』『優しい彼の溺愛クリ責めマッサージ』『おもちゃで感じるイキ地獄♡濃厚クリ責め汗だくえっち』とか」

「えっ……!? な、なんで……!」

「履歴見たって言ったでしょ。もちろん全部中身までチェックしてますよ。先輩がこんなにえっちな漫画や動画ばかり見てるって知ってから、こんなことされたいんだ♡って俺……綾先輩が家に来るたびに興奮しないように気をつけるの大変だったんですよ」

（全部見られてたなんて…なんで大輝にバレるって気づかなかったんだろ…）

「クリを弄られるのが大好きな先輩……直接クリにローターあててあげますね」

「だ、だめっ！やめて！」

（パンツ越しでも声我慢するの大変だったのに、直接当てられるなんて、絶対だめ。絶対声出ちゃう！）

首を振って否定するが、手足を縛られた状態じゃ、何もできない。大輝は、私の言葉を無視してローターをクリトリスに当てた。

「先輩の本心、確かめてみましたっか」

「あっ！ああ…っ♡ちがっ…っ♡ああっ♡」

「先輩が見てた作品、ちがうって言っても本当は悦んでる女の子の話ばかりだったし」
有無を言わさぬ笑顔を向けられて、さらに強く押し当てられる。

ヴィイイン…ヴィイイン…

「うう…♡っ…ああっ…♡んっ♡あっ、ああっ…♡」

「綾先輩って脱毛してるんですね。邪魔な毛がないからぴくぴく反応してるクリがよく見えます。えっっ♡」

「や…だあっ♡あっ、みないでえ…っ」

「見るに決まってるでしょ。ほら先輩、クリがもつと大きくなってきましたよ」

（直接は、だめ！♡うう、大輝ずっと見てる……パンツ越しでも気持ちいいけどびりびりしゅるレベルつよい……♡おまんこきゅんきゅんしちゃう……♡）

「っん……！あっ♡だめえ……♡♡」

「はは、声甘くなってきた。聞いたことないえっちな綾先輩の声……そんな可愛い声出されたら、俺張り切っちゃいます」

「あっ♡……ああっ！♡」

「はあ……気持ちいいの逃がせなくて、びくびくしちゃう先輩。可哀想だけど可愛いなあ」

「や、やだあ……!!ん、んう……っ！♡♡そこばかりっ、ほんとにだめ……っああ♡」

ヴィイイン……ヴィイイン……

気持ちいいところばかり的確に責められて、腰が勝手に浮いてしまう。

「先輩、腰が浮いてきてる……」

「やっあ、んんっ♡あっ、だつてえ……!」

「俺から先輩のびちゃびちゃになったまんこが丸見えですよ」

あざ笑うように言って、大輝は愛液を掬うように入口をそっと撫でた。

「ふああっ♡♡あッ、んんッ♡」

「ほら、ぐちゅって。ぬるぬるで指入っちゃいそうですよ」

「あっ♡やだ♡ひッあう…♡うう♡や、それっ…♡」

「浅いところぐちゅぐちゅって綾先輩のエロい汁つけてぬるぬるローター完成です。これをクリの先っぽからやさしく押し付けて……」

「あつ、あぁッ…！ひぁあっ♡あうっ♡あ、きもち…♡」

滑りのよくなったローターを押し当てて容赦なくクリトリスを刺激し続ける。抵抗しようにも、手足が縛られている状態で、どうすることもできない。

（こんなこと…ダメなのに…先っぽからぞわぞわきちゃうっ。直接ぶるぶる、気持ちいいの強いっ！こんなのすぐイっちゃう…！）

「ほら、いいんですよ。綾先輩が俺のPCで見たエロ漫画みたいに、気持ちよくなってください」